冬休み明けの指導

私は３つくらいあるように思っています。

安心

安心というのは、ほっとさせるということです。
私はこんな演出をよくしていました。

『ところで、みんな冬休みに予定通り、計画通りに過ごせたという人、手を挙げてごらん』
数名が手を挙げる。
『なるほど、なるほど。では、計画通りには行かなかった、という人？』
ここで、子どもが手を挙げるより先に教師が、
『はあい！』と手を挙げてしまうのです。
子どもたちは、くすくす笑います。
『いやあ、先生ね、冬休みは２０冊本を読もうと思ったんだけど、１７冊しか読めなかったんだよ。だから、今、なんとか１月中には２０冊いくように読んでる』

ここでの大事なことは、昨日までのことを責めないと言うことです。
それよりも肝腎なのは、これからの生活をきちんとさせることです。
ですから、提出物も忘れた場合は、『それで、いつまでなら自分は持ってこられると約束できるの？』ということをきちんと確認してあげることが大事なわけです。

安定

安定というのは、「心を荒れさせない」ということです。
例えば、私は次のようなことを始業式前日にしていました。

・一人一人の靴箱のぞうきんがけ
・　　靴箱　のネームシールはがれの補修
・コートかけの　　〃
・ロッカー　の　　〃
・コートかけの金具の補修
・ロッカーの内側全面のぞうきんがけ
・児童机のぞうきんがけ
・机の整列
・床ぞうきんがけ
・掲示物の補修
・いらないものの処分

なあんだ、掃除じゃないかと思われるかもしれません。
まさにその通り、私が前日にやったことといえば、要するに子どもたちが気持ちよく新学期をスタートできるように「心」を遣うということなのです。

ほどよい緊張感

昨日までの冬休み気分を断ち切る必要があります。
そのためには、１モジュールでもいいから授業をすることがいいのです。
しかも、活動主義の授業では駄目です。
例えば、調べ学習をしたり、工作やったりすれば、昨日までの冬休み気分を断ち切れないでしょう。
ぴりっとした教師主導の授業がいいのです。

授業を観る目をどう培うか

ものを観る目というのはどのように培うことができるかというのは、その道その道である特定の方法論があるようです。
しかし、教育界ではどうすれば「授業を観る目」が育つのかということが、安定的に語られることはほとんどありません。
つまり、そうした方法論が確立されていないのです。
では、仮にそれを「骨董品」の世界に求めてみましょう。
すると、いわゆる「目利き」になるためには次のようなことが言われます。

偽物を見せるよりは、真物をたくさん見せる。

つまり、良い物と悪い物を混ぜて見せ、それを比較するのではなく、若い頃から良い物だけを見せていった方が「目利き」になるというのです。
これは、教育界でもある程度当てはまりそうです。
いい授業をたくさん観ていると、そうでない物は直感的にわかるようになります。
しかし、直感というのはオカルトに陥りがちです。
そこで、良い授業をたくさん観ると何がどう変わるのかと言うことなのですが、私は要するに「授業分析をするコードが増える」ということだと思っています。
コードというのは、記号論でつかうテクニカルタームですが、要するに視点のことです。
良い授業を観ると、この視点が増えるということだと思うのです。
つまり、はじめは漫然と「良い授業だなあ」と思っている。
でも、そのうち「なぜこの授業はよいのだろうか」なんてことを考えるようになる。
すると、「発問」「指示」という視点が、浮かび上がってきたり、「導入」のあり方の問題に思いがいったりします。
こうすることで、授業を観る視点が培われるのではないかなあと思います。
さて、熊本の大津市立室小学校は３年前から学力向上フロンティアの指定を受け、学力を向上させられる教師の力について、研究をしています。
その学校の授業を参観するときの評価シートがあります。
大枠ではありますが、シンプルで良くできていると私は思います。
ご覧下さい。

何が教師の力を付けるか

結局、そこそこの努力やそこそこの苦境からは、そこそこの成果しか得られないのではないかという気がしてなりません。
「溺れる者は藁をもつかむ」といいますが、必死になっている人がもっとも周りからの吸収がいいのではないかと思うし、思考も深いのではないかと思うからです。
しかし、苦境に立つ人間がすべて、大きな成果や高い技術を身につけるようになるかというとそうではありません。
ある人は、その場から逃げてしまうでしょうし、ある人は人のせいにしてしまう、ある人は努力しようとせず没落してしまう……。
そうすると、力を付けられる人に備わっている資質とは何なのかということが気になってきます。

意見を持ってから人の考えを聞く

「どうしたら良いでしょうか？」と、若い頃私はよく先輩教師に訊いていました。
先輩教師は親切でしたのできちんと教えてはくれましたが、今思えば随分困っただろうなと思います。
「どうしたら良いでしょうか？」という問いは、実に虫の良い問いです。
「わからないからあなたの持っている知恵を無償で拝借させてください」ということです。
うまくいっても、特別感動はないですし、もしうまくいかなかったら「先輩のいったことが間違っていたんだ」と思えばいいわけですから、気楽なもんです。
私は、あるとき（これは、ひょっとしたら当時の中井教頭先生だったかもしれないのですが……）「人に訊くときは、必ず『私はこう思うのですがどうですか』と訊きなさい」といわれ、気がついて、それ以来できるだけ自分で考えてから、人に尋ねるようにしています。
自分の意見を持たずに、人に尋ねることは、「安易な結果主義」であり「責任転嫁の温床」になりやすいのです。

自分の責任で仕事をしているか？

みんなで授業をつくることは、ある種の授業の場合は有効です。
特に学校研究の場合そうしたこともあると思うのです。
しかし、私の経験で言うともっとも力がつくのは、自分だけで授業を作るときなのです。
それはとても怖いことですが、当然といえば当然です。
責任をとるのは自分自身ですから、怖いですが、必死になります。
私は、ご存じの通りいくつかの研修会を主催してきました。
その中では、サークルメンバーの授業というのがあります。
私は事前に次のようなことだけは、授業者に言います。
「参加者は、学校の授業公開と違ってお金を払って参加されます。つまり、皆さんの授業をお金で買っているのです。参加費に値する授業をしてください。」
こうした状況の中で、一つの提案授業をするのに１０冊程度の本を読むことは当然だという共通認識があります。
そして、私たちは事前に一度だけ予行演習の会を開きます。

サークルメンバーの前で授業をしてみるのです。
経験のない先生方は、１秒持ちません。
前に立った瞬間に「視線が泳いでる」なんていわれてストップです。
いわれた人は、そのまま廊下に行って、自分で練習します。
ベテランになってくると、３０秒くらいやって自分で「うーん駄目だね。もう少し練習してくる」といって廊下に行きます。
だんだん人がいなくなっていくのですが、そのうち自他共に「合格」の人が出てきます。

これは、たいへん緊張します。
「学校の研究授業より緊張する」というひとや「はじめて、足が震えた」という人や、「朝から吐き気がする」という人もいます。
でも、こうしたことをして本番の研修会で授業すると、参加者からはいつも「大絶賛」をいただきます。

自分で授業を作ると、失敗したとき誰を責めるわけにもいかないのです。
あくまで自分の責任でやることになります。
そうすると必死です。
必死になると、自分で気づきもしなかった力が発揮されるのです。
こうした中でこそ、教師の力がつくのだろうと思うのです。

行動の人でいられるか

口で言うことは、簡単にできます。
教師は、特に口で物を教えるプロです。
ですから、反面「ことば」に頼りがちになるのです。
言葉で、「ああしなさい」「こうしなさい」と指導することを、私は「人さし指の指導」と呼んでいます。
つまり、あるべき姿を指さして「そこまで行きなさい」と言うわけです。
一方、「あるべき姿」を教師自身が体で示すのを「背中の指導」と呼んでいます。
つまり、行動で子どもたちに示すことです。
例えば、掃除の時間は、一緒にやることは当然として、先生がもっとも汚い、嫌な仕事を率先してやっているかと言うことです。
私は、掃除の時は必ず黒板下の床をはいつくばって拭いていましたし、トイレ掃除の時は、素手で床や便器のぞうきんがけをしていました。
こうすると、子どもたちは自然と私に声をかけ、手伝ってくれるようになります。
むろん、私の場合は教育効果としてそれをしているというよりは、むしろ生き方なのですが。
全人教育を提唱した玉川学園の小原國芳は、次のように言っています。

人生の最も苦しい
いやな辛い損な
場面を真っ先きに
微笑を以て担当せよ

なかなかできないですね、微笑みを持っては……。